

2023年1月10日

～毎月10日は人権を考える日～

私と兄

西条市立西条東中学校 1年

秦 彩華

「第41回全国中学生人権作文コンテスト」愛媛県大会入賞作品
☆ 最優秀賞（松山地方法務局長賞）☆
（松山地方法務局ホームページより）

私の四歳上の兄には「自閉症」という障がいがある。発達障がい的一种で、一般的に言葉が遅れる。強いこだわりがある、曖昧な情報の処理が苦手などの特性がある障がいだ。

兄は三歳のときに自閉症と診断された。母からは「育てるのが大変だったんよ。」と聞いたことがある。小学校の頃から支援学級に入っているいろいろな支援を受けてきた兄は、今は高校に進学して寮生活を送っている。

去年の夏のことだ。ある日、私と母がリビングで話していると、出掛けていた兄が帰ってきた。「おかえりー。」「ただいまー。」と他愛もない会話をして兄は手を洗いに洗面所へ、私は自分の部屋で読書を始めた。

しばらくして、母が兄に何やら言い聞かせているような声が聞こえてきた。よくあることなので特に気に留めずに読書を続けていたが、次第に母の声が大きくなってきたので、何事かと思ひ、リビング近くまで行って、母に隠れて話を聞いた。

母は洗面所から戻ってきた兄に「冷凍庫にアイスあるから、食べていいよ。」と言っらしい。兄は冷凍庫を開け、ごそごと探し始めた。ところが、兄は冷凍庫だけではなく、製氷室や野菜室の引き出しまで全部開けて探し始めたので、見かねた母が「ここ！」と、冷凍庫の上から二番目の引き出しからアイスを出し、「ちゃんと言葉の意味を理解して！」と注意したことから今に至っらしい。「もうちょっと自分の頭で考えることができないの？」と強い口調で兄を怒る母の声を聞きながら、私は兄の気持ちを思いやった。

自閉症の人は言葉や指示が素早く理解できないという特性がある。きっと兄は、母の言葉を理解することができず、パニックを起こしたのだろう。一方、理解してもらえずにイライラしてしまう母の気持ちもとてもよく分かったので、どちらが悪いのかは私にはわからなかった。

しかし、もし兄のような障がいをもった人でなくとも、母の言い方では伝わらなかったかもしれない。世の中にはいろいろな人がいるのだから、「理解できて当たり前」の言葉は人それぞれ違うし、伝わらないこともあるかもしれない。二人の様子を見ながらそう考えた私は、これをきっかけに兄への接し方を見直すことにした。

まず、兄に対して言葉を略さずに細部まで伝えること、特に、こそあど言葉を使わないように注意した。例えば机の上にある醤油を取ってほしいとき、「あれ取って。」では兄には伝わらない。だから、「お兄ちゃん、醤油を取って。」と言うようにした。

また、指示の内容を具体的に伝えることも、とても大切だ。「冷凍庫にアイスがあるから、

食べていいよ。」という言葉で「冷凍庫の二段目の引き出しにアイスが入っているから食べていいよ。」という言葉にしていれば、きっと母の伝えたいことは伝わったし、兄も混乱しなかったにちがいない。

私は昔、兄と話すのが苦手だった。兄との会話は一回で伝わった試しがなかったからだ。理解できないとき、兄は何度も何度も「もう一回、言って。」と言う。「なんで伝わらんのか！」私はだんだん面倒になって、兄と話したくなかったこともあった。しかし、今回のことで、私のほうが「分かってもろえるように説明をしよう」という気持ちに変わると会話がスムーズに進むようになった。そうして、私の中の「面倒くさい」がなくなると同時に私の兄への苦手意識も消えた。

兄にとって「自閉症」は一生つきあっていかなければならない、変わることはない個性だ。まわりの人とのコミュニケーションをとりたくて、兄は「もう一回言って。」と何度も何度も繰り返す。兄に「面倒くさい」はない。だから、兄と私の壁は兄の「自閉症」ではなく、わたしの「面倒くさい」という思いだったのだと私は気づいた。

自分のことばは「伝わって当たり前」ではないと知ること。伝わらないのは相手の問題ではなく自分の問題だと考えること。これが、私の見つけた兄との一番いい接し方だ。

世の中の障がい者差別もこの「面倒くさい」が関わっているのではないか。接客が面倒だから障がい者の入店を断る。話が合わなくなるのが面倒だから障がい者と話さない。そう考えれば、「面倒くさい」は差別そのものだとすら思えてくる。

体、心、知識……人は誰でも違う個性を持っている。だからこそ、障がい者に限らず、それぞれが個性に寄り添った接し方を見付けていくことこそが、障がいを超えて理解しあう社会をつくっていくのだ。

私もこれからは兄だけではなく、さまざまな個性の人たちに寄り添えるようになろうと強く思う。

今回の「人権のチラシ」は、西条東中学校の1年・秦 彩華さんが、法務省の「第41回全国中学生人権作文コンテスト」愛媛県大会に入賞された作品（全文）を掲載します。

「自閉症」のあるお兄さんとのコミュニケーションをとる中で、なかなか理解し合えないことがあったそうです。そのとき「面倒くさい」と思う自分に気づかれました。しかし、お兄さんに「面倒くさい」はない、お兄さんと自分の壁はお兄さんの「自閉症」ではなく、自分の「面倒くさい」という思いだったと言われています。

そして、伝わらないのは「相手の問題」ではなく「自分の問題」であることに気づかれました。

どんな「差別」も、「差別する側」の問題だと思いませんか。そして、当たり前かもしれませんが、「差別する側」が差別をしなければ差別はないのです。

西条市人権教育協議会 西条市人権擁護課